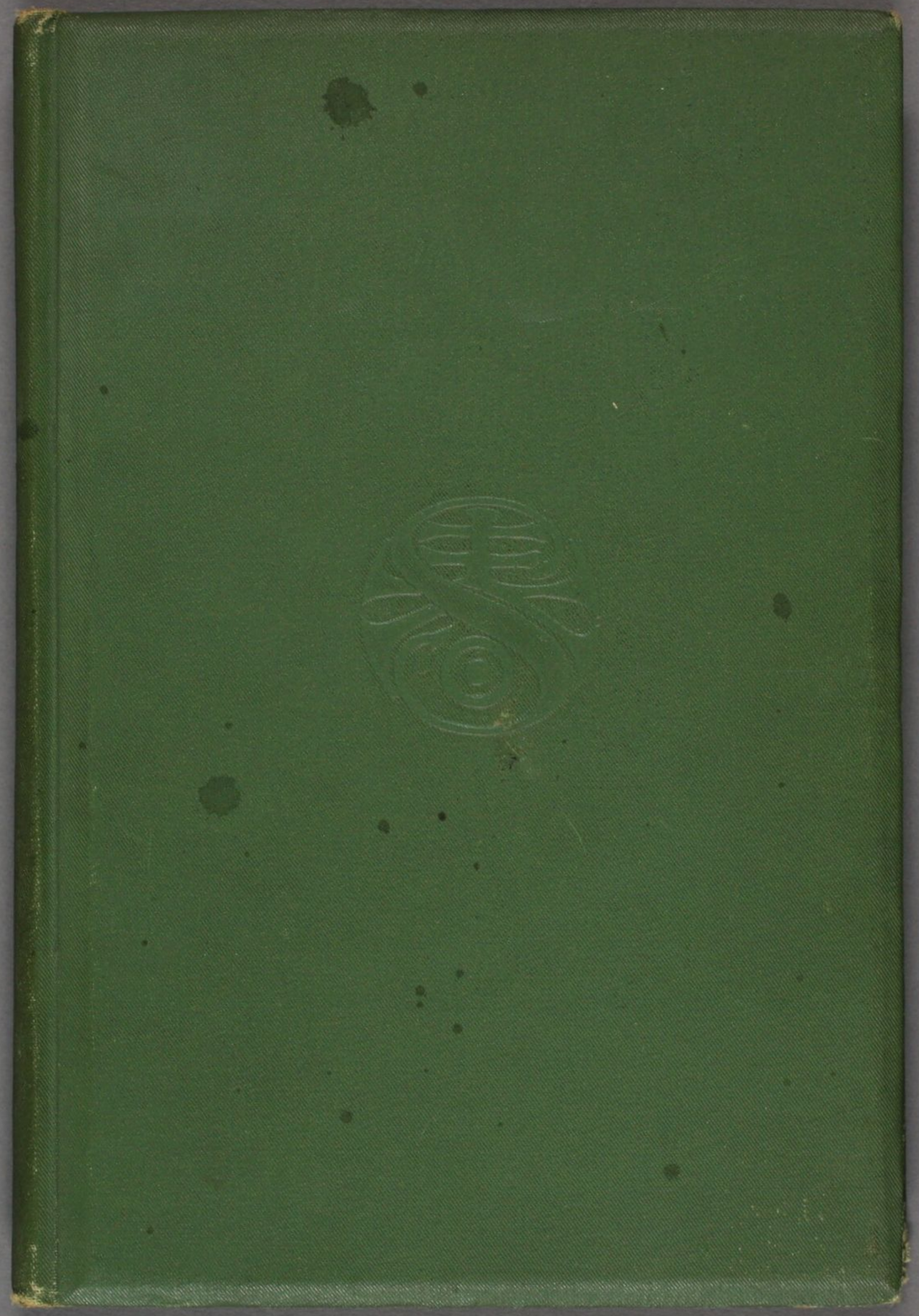
よひらら

李於堂雅著



無涯君、脫白披緇の後、杳として其の消息を聞かず、一別十餘年、時に夢寐の中相會ひて詩を談ずるあるのみなりしに、今春雨雪の日忽然として君の弊廬を訪ふにあひ、欣び迎へて談を交ふること數刻、はじめて君が朝鮮に派せられて一院を創し、また歸つて峽中の谷村に長安寺といへる一大刹の荒蕪廢滅せんとするを興復して、經營數年終に其の功を成したるの後、功成つて居らず、脫然として今都門に雲遊せるを知り、顧みて予が安居幾歲、一事成る無くして徒らに筆墨の間に老いたるを慚ぢたり。後また數日、君一詩卷を寄せて曰く、此

予が甲斐に在るの日、淨業の餘暇、山中の一深潭、緒名の淵と稱するもの〻傳說に本づきて作れるものと。披いて之を讀むに詞藻富麗、神氣雋爽、大に時流と異なるものあり、予又愈〻驚きて、能く勤むるもの〻能く餘閑あるを見、顧みて予が日々忽忙、しかも又終に一事をも成さずして徒らに神を耗し軀を枯らすに止まれるを慚ぢたり。今君に勸めて其の詩を公にせしむるに際し、聊か君の人となりを叙して以て君を知らざるものに告げ併せて予の感ずるところを記し以て引となすといふ。

露伴

# 緒名が淵

中谷無涯

## 其一

暮の天　夕映うつる雲の峰、
猛りたつ獅子、舞ふ胡蝶、
虎嘯けば　さと起る、
風に亂るゝ旗雲の　流るゝ水や、
瀧津瀨の　さゞらさゞ波、
疊む波、うねる大浪、
碎けては　狂ひたつ濤、

久方の　天の河原に
かけ橋の　深紅うすらぎ、
赤は褪せ　橙黄消えて
黄に殘る、　色彩かはる
束の間も　見る目あやなる
山の端に天津乙女の
御手飾る指環の玉か、
星一つ、紫匂ふ大空に
ちらりと光る閃めきに、
開くや　天の星の花、
八つ九つと數ふれば
散るや　火花のちら〳〵。



天つ御星の　數知れず。

黑む山々。　暗の谷。
森に聲なく　鳥眠り、
溪深くして　音を潛む。
羊腸の山路　谷に沿ひ、
崢嶸の山峰　頭を壓す。
黑きは　林。
光るは　流れ。
長風　梢を渡りて襟もと寒く、
山鳥　闇に叫びて腸斷たる。
往けど盡きせぬ　闇の路、

森を洩れ來る　一點光。
明るく――暗く――、
薄く――濃く――、
暗夜に馴れたる目は迷ふ。
鈴　ちやら――ちやら、
蹄　はた――はた、
なつかしの音や、
なつかしの聲！。
「妾の思ひは深さも深い
緒名が淵よりまだ深い。」
馬おふ　足どり、
響く　鈴の音、



「深い思ひも屆かぬ筈よ、
緒名が淵には底がない」
泣くか　淵に潜める虬龍？、
訴ふか　底に宿れる神靈？。
馬追歌　聲細々と、
斷えつ　續きつ　木魂に通ふ。
なつかしの聲――姿なき、
鈴は響く――馬ぞなき、
蹄は音す――嘶かず。
うばらまつはる徑蹈み分けて、
足尖さぐり　下り立つ下に、
くろ〳〵黑む　黑き淵あり。

檐かたむきて　戸のなき祠！、
燈火くらく　風にゆらめき、
狐格子に結へる願文。

彼方の山の尾上に薄き
色の一刷毛、見る〳〵間なく、
やゝ濃き光　黄金に染まり
現はれ出たる片碎れの月。
あびせる光りほのかに輝す、
深き淵には天津御星の
天下り來て底に宿れり。
この星　靈あり　歌ふか　歌を？



大山祇の神業ならし、
天津御鉞に巖を削づり、
天津御鑿に石きり穿ち、
水源遠き奥山陰の
岩間たばしる清水みちびき、
深きにそゝぎ湛へしものか？、
大綿津海の鹽たる水に
染ませじとてや企めるものか？
穢れを知らぬ眞清水なれば
浮世の風に穢させじとて、
水口閉ぢて堰きにしものか？
瑠璃を解きたる深き淵なる

底ひ知られぬ底なしの淵。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其二

第一聲　老松の吟

山の尾上に幾年か經し
われ老松のむかし語らむ。
それ萬代の榮えと祝ふ
我松の實の笑みて翻れて
草の葉すべり　地に落ち伏して、



待つや　日靈の大御めぐみを、
濕る　露雨　うるほひふくれ
皮は破れつ　若芽はめぐみ、
裂けて細葉の　六つ七つ八つ。
子日するとて　ひく里の子の
目にもれ　育ち、風にもまれつ、
霜には凍てつ、雪に壓れつ、
春毎延びて脊たけは聳え、
枝は下垂れ　葉は重なりて、
しのゝめの朝日かげらひ、
夕づゝの夕日うつらひ、
風吹く夜には琴を奏で、

月の夜半には雫をちらし、
老龍吟じ　猿悲しみ、
白鶴巣ひ　驚愁ふ。
木々の帝と尊ばれつゝ、
年經し我がまのあたり見し、
世の有様のかはり〳〵て、
見よ　彼谷の杉の群立、
檜の林、柏の木立、
杣の手に揮る刄廣に倒れ、
肉は削られ　皮逆剝がれ、
挽く鋸に割かれし板は
山かつの肩　馬の背に、



積まれ　擔はれ　運び去られて、
殘る株は雨露に洒れ、
ちがや　小笹や　うばらや　葛、
茂り　蔓り　まつはる荒野。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第二聲　巨巖の吟

あな、がまや！松の繰り言、
汝はいふ　老にけらしと、
聽け、われに。
我蒼穹に輝る星の
ひかり初めてし　往昔に

成出し由緒も　白雲の
徘徊ふ山の　鳴りどよみ
天地眞暗く、はためく電光、
雷とぞろき　暴ぶる暴風、
崩るゝ山岳、もえたつ猛火。
岩飛び、石舞ひ、
灰降り、砂うち、
裂けて――碎けて――
崩れて――壞れて――
燃えて――沸きたち――
溶けて――流るゝ――
石の湯、泥の湯、



煮えたち沸ける大熱河！
天に星なく、月なく、日なく、
黑く　眞暗く　雲　烟。
地には人なく、草なく、木なく、
あやめ分たず　唯眞暗！
沸くや　石の湯、泥の海。
聞け！八萬の魔の叫喚、
世は常暗と喊の聲。
どつと　ルドラの手を擧げて、
招けば　世界けし飛べと、
荒ぶ暴風の　どう〳〵〳〵。
狂ふ焔は　たちてはくづれ、

砂礫は　雨　霰飛ぶ。
見よ！　天上の黒雲の間に、
天津獵矢を　つぎ早く射る、
雨の御神の　弓弦ひぐき、
銀箭　亂れ、　矢玉　散り交ふ、
熱石　雨に　喚めき呼び、
熱沙　雨に沸き　湯氣競ひたつ。
血に渴きたる羅刹の叫び、
肉に飢ゑたる惡鬼の喚き。
滔々く　天うつ激波の怒り、
世界流せと押し來る洪水。
風がかなぐり捨てたる雲間、



はづかの隙間のぞける蒼空は、
荒れし下界に平和の光明。
風　なぎ——雲　絶え——
雨　はれ——霧　散り——
畑　あとなく、　畑は絶えつ、
泥水ひきてしづけき野原、
白雲たゆたふ山の麓に、
熔岩凝りて削れる巨巖！
我　その巖、巖ぞ、われは！

我が肩に　草生ひ茂り、
我が胸に　苔蒸すまでに、

雪融する春を　いく度、
霜を置く秋を　いく度、
迎へもし、送りもしけむ。
花咲く草木なき世より
鷲の　巣籠りすべく
松が梢　天摩で聳え
枝ふり茂る今日を見て、
己れの齢　數ふれば
恒河の沙　數ならず、
堅に長かる　年に月
數經し我を老といふ。
汝等は　いまだ若けれ。



我　巨巖、汝　老松と、
比較べて人間の世を見よ、
噪がしく　爭鬪やまず、
強きもの　弱きを仆し、
長きもの　短きを壓し、
愛くしみ、憎しみ、怨み、
憂ひ、嘆き、怒り、悲しみ、
際限なく　悶え　苦しみ、
たま〳〵に得たる樂しみ、
うれしさも　繼ぐに　煩ひ、
惱ましく　驕り　高ぶり、
人凌ぎ　人を慢り、

我、汝、汝等、彼等と、
争闘の絶えぬ　人の世、
甲斐もなき　敢果なき望
遂げんとて、　鬩ぐ人の世、　噪ぐ人の世！。

露伴曰、先づ陰森幽窅の地の緒名の淵に相應せる巨巖を假りて、これに言はしめて人世を嘲り咀はしめ以て後段の槪染をなす、手段は狡獪、着想は幻奇、面白し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第三聲　鷲の吟

人の世を嘲り咀ふ　汝巨巖、
肉なく　血なく　心なき汝、



涙なく　汗も生命もなき汝、
冷く　堅く　情なき汝。
永久へに　搖るぎ動かず
峽にかゞまり　蹲踞り居て、
汝が經し時間　長く　長きも、
この狹き谷　恒に移らず。
進むてふ事　汝は知らず、
あはれなる哉！
見よ！われを、
巖頭つかみ　身つくろひ
天の羽衣　そよがせて
肩そびやかし　頭擧げ、

一たび呼べば、
天に飛ぶ鳥　木立にかくれ、
二たび呼べば、
野に食む羊　戦き怖れ、
三たび叫べば、
谷に聲なく、淵に影なし。

搏つ翼に　旋風を起し
天の八重雲　凌ぎ〳〵て、
空に輪をかき　渦書き　伸せば、
星の都は　雲なほ遠く
雲の海晴れ、雲の波なく、



目は極まらず　たゞ廣き空、
涯際なく遠く　上なく高く
障礙なき場所　唯獨り舞ふ、
俯むく下に人の世低く
小さく、卑しく、人の世穢し、
地に住む人の　高しと稱へ、
仰ぎ尊む　富士の高根も、
我が舞ふ下に　低くも低し。
千里の翼　千里の眼、
無礙の虚空は　我が翔ける場所、
誰れか障ふる　我が進むみち？、
何か距つる　我が來し方を？

地上に人の　求むる自由、
我は虚空に　得てぞ樂しむ。

血潮のかよふ　肉ある我に、
情思は起り　樂しみ宿る、
苦しみ來り、悲しみ移つる、
怒りは萠し、憎しみ起る、
戀に惱めば　妬も燃ゆる、
餌食に飢ゑ、水に渴く、
睡眠に休み、希望に悶ゆ、
長き世へ經しと誇るな、巨嚴。
我鷲の　生命短く、



羽衣の色　衰へ易く、
熱き血潮の　假令冷ゆべくも、
雌かる鷲　その子はあらん、
子には子あらん、孫に子あらん、
血潮流れて　子に傳はり、
力分れて　孫に傳はり、
我鷲の種類あるきはみ、
我血、我靈魂、永久に絶えせじ、
鳥類の君公、羽族の帝王、
代々に傳へつ、繼ぎ讓らして、
鷲の種類　絶えぬきはみは、
我は生存ふと　我は思ふなれ。

雌を戀ふる雄の　何ぞ優しき！
雄を慕ふ雌の　何ぞ切なる！
雲分け騰り、霧さけ下り、
雄は重きを厭はず運び、
雌は遠きを厭はずあさり、
立てし巣堅く迭に守護り、
仇讎をいましめ、卵を暖め抱き、
巣籠る雛の飢に叫べば、
八重の雲路を遠しともせで
巨浪さわぐ洋にも通ひ、
強き敵と搏ち闘ふ。
霧たち籠め、し秋の夕に



雛呼ぶ我の聲を聞ずや、
肉あり　血ある我鷲の
殘酷といはるゝ心のうちに、
誠にもゆる情籠れり。

露伴曰、既に巨巖を出して人世を叫ばしめ、また猛鳥を追出して巨巖を嘲らしめ、層々相次いで緒名の淵の神を描くの地を爲す、巨巖も猛鳥も其の神祠あるの地と能く調和して情景の關聯不離不即の間にある、欣賞すべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

祠にいつく神は何なる？
狐格子に　願文多く

結へる由緒　誰かは語る？
語るものなく、知るよしもなし。
山氣冷く　骨身に迫まり、
片破月は　うら物凄く、
人氣なき塲所、人なき夜半の、
寂びて靜けく　死せるが如く、
心さびしく、氣は　いや滅入る。

搖ぐ灯かゝげ　祠によりて、
願文ほどき、ほどき讀めば、
覺束なげな婦人の手蹟、
いづれ切なる戀のねぎ言、



叶はぬ思ひ　叶へてたべと、
思ひ迫まりし切なる願ひ、
いづれか　あはれ　あはれならざる？

「深い思ひも屆かぬ筈よ、
緒名が淵には底がない」
緒名が淵、緒名が淵！
この淵深く　底なしと聞く、
歌は底なき　底に歌はれ、
鈴は底なき　底より響く。
歌のぬし　淵の虬龍か！
鈴のおと　底の神靈か？

祠にいつく神は何なる？

鈴の音　いや近づきぬ、
月暗く、風冷かに、
物悽く、氣はいやめいる、
淵の水　鳴りどよめき、
水けぶり　波立ちさわぎ、
霧こめて、明るく――暗く。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其三



第四聲　執着の吟

鳥類の君公と誇れる汝、
羽族の帝王と高ぶる汝、
血潮は通ひ　情思ありといふ、
短き生命に　其身を縛られ、
世の荒風に　攻め惱まされ、
希望に悶え、心を焦がす、
限ある身の　限ある汝、
限ある小さき力ある汝、
涯際なき　廣き虛空を翔り
低く卑しと　人の世笑ふ、
あはれなるかな！汝鷲、

子孫代はりて　生存ふといふ、
汝は汝、子は子の身なり、
孫は孫なり、曾孫は曾孫、
形骸ある汝　限ありて、
形骸ある汝　身は朽ちぬべし。
子死し、孫死し、曾孫も死せん。
世の荒き風　汝が群を攻め、
世の競爭は　汝が家族を絶つ、
形骸ある　實に煩はしきかな！
身に宿假れる心は強く、
形なくして力ありと知れ。
限なき廣に亘り、



涯もなき長きに延びつ、
底ひなき深きに沈み、
盡くるなき變化を極はむ。
思あり、我はありけり、
思なし、我はなかりき。
息絶え　死して、形なく朽つ、
されど　思と願と強くば、
我あり、我あり、我は生存ふ。
見よ、今尙ほ願を運び
切なる心を叫へよと願ぐ。
戀に惱める乙女幾人！

露伴曰、緒名の淵の神に至つてはじめて現ず其

神執着を本體とするに似たり願はくは其の本相を看ん

我もまた　人の世咀ひ
人の世を　怨み怒りき。
我はたゞ　弱き婦女、
天さがる鄙に　生ひ立ち、
顔よしと　誇る色なく、
品よしと　つくる術なく、
山だちの　我は賤の女。
黒髪のみだれを梳かず、
野邊に咲く花　折りかざし、
荒栲の　太布をのみ着て、



綾錦　身にはまとはず、
玳瑁の　裝飾をつけず、
翠黛に　眉を畫かず、
紅粉に　膚をかくさず。
朝まだき　苔の清水に、
口漱ぎ　顔洗ふのみ。
たしなみと　人はいへども、
山だちの　容體つくらず、
山田鋤く　春の苗代、
向脛に泥かきよせ、
手肘に水沫かきたり、
すく鍬の土を身にあび、

桑の葉を摘みて蠶を養ひ、
薪樵り、炭焼きつくり、
馬を追ひ、市に炭賣り、
日光にはやけ　風に輝きれ、
顏あかく、膚燻ぶり、
男とも　まがふ扮裝、
猿とも　見るべき姿。
さはいへど　我また婦、
心には　優しき情、
情には　燃ゆる戀あり。
我が戀　清く　汚れ無かりき。



幼稚馴染の美しき戀！。
寺に通ふも手に手をとりて、
春さり來れば　蕨を折りに、
秋の朝は　茸あさるとて、
茅野　黃を帶び　風　身に泌めば、
笑みて翻るゝ栗實を拾ひに、
霜おく冬は　落葉を搔きに、
父母　野良に　働く折は、
割籠がよひも　二人して行く。
我は賤の女、君は山がつ、
我馬追へば　君馬に乘り、

我乗る時は　君馬を追ふ、
君草笛に息籠むる時、
谷に　尾上に　木魂の調べ、
我聲あげて追分節歌ひ、
調べにつれて鄙ぶり歌ふ。
春の朝も、秋の夕も、
君ならずして誰　友とせむ？。
たゞ友として睦べる日頃、
心　春日の如く長閑けく
憂きも　辛きも　知らで過しき。

我繭を煮て絲績む時に、



回ぐる小車、回れる框に、
纏ふ生絲の思ひはながく、
繰れど　たげども　盡くることなく、
小さき胸は　唯迫まり來て
鍋におどれる繭にも似たり。

絲を繰る手に　筆執り難く、
牛の角文字　書くよしもなく、
獨り抱ける　心の思ひ、
心のもつれ　解くる間なく、
絲繰る間も　君を思ひき。

露伴曰、緒名の淵の神、式内の古き神なとなら

てたゞ山村の一鄙女たる、意外に出でゝ面白し。
又曰、山だちは猶山そだちといふが如し。例無き用語にはあらねど、山賊をも山だちといへば、何となく好ましからぬ語におもはる。

君を見ぬ日は　心むすぼれ、
君見る時は　唯面はゆし、
我が傍に來る君　辛く、
去るゝ時は　唯殘り惜し、
君快く語らひたまふ、
我は應答も　ものうき思ひ、
笑むも面伏、　泣くも面伏、
幼稚馴染に　何をはにかむ？



幼稚馴染に　何をつくらふ？
胸にむすぼれ、心に秘めて
我は思ひき、君をゆかしく、
人はこれをぞ戀といひける！。

あゝ戀なるか、さては戀かや！
戀は辛しと　人はいふなる、
實にや　辛きはこの思ひかな！。
我情思あり、君忖り知れ、
我に戀あり、君忖り知れ、
我は賤の女、君は山がつ、
賤の女の戀　何ぞ嫌はむ、

山がつの戀　誰か卑しむ？
戀へども　口はいふ勇みなく、
思へど　舌はたゞ言ひ澁る。

容姿醜き　我賤の女も、
戀にやさしき　やつれはありき、
男にまがふ　力ある身も、
戀に惱める　やつれはありき。

肥えて高かる　頰肉落ちて、
獨り悶ゆる、月あかき夜、
君がすさびの　笛の音　遠く、



斷れつ　續きつ　風のまに〳〵
聞けば　いよ〳〵　思はまさる、
思ひあれども　打ち明けずして、
苦しめる身は　何にか臆せる？

君が姿は山がつに似ず、
日光にあたれども　膚きよらに、
目は野兎の　優しきに似て、
露照る黑眸　光りすゞしく、
木樵るすさびに　鄙ぶり歌ふ、
聲はとほりて　節　面白く、
笛を調ぶる　小指は華奢に、

鋤を執れども　節高からず。
女好きする姿といはる、
聞いて嬉しく　また　妬ましき。
秋の祭の　舞臺に君が
女形姿の　稱讃られしを、
聞いて嬉しく　また　安からず。
形骸なき身の　今も忘れず。
ア、嬉しかりしも一時の夢！
　樂しかりしもうたかたの泡！。

鹿毛駒追うて市の歸るさ、
人影絶えし　細崖徑に、



思ひ餘りて　耻かしげなく。
君に明せり、胸の思ひを。
鹿毛よ、汝も傍聽せし？。
ア、！我血潮　今もなほ沸く。
君青春の望ある目に
光滿たして語りし言葉、
ア、忘られじ！
鹿毛よ、汝も傍聽せし。
嬉しかりしは　この日の夕、
樂しかりしは　その月の夜、
ア、忘られじ！
鹿毛よ、汝も傍聽せし？。

我が戀ふる如　君また戀ひき、
暖き血潮たがひに通ひ、
燃えたつ情　胸に行き交ふ。
市の歸るさ、月下の誓ひ、
星の妬みも、露の恨みも。

戀なればこそ　憂きを厭はず、
戀なればこそ　辛しともせず、
雪降る夕　山に炭やき
氷柱凝る朝　馬追うて行く、
市の歸へるさ、一向に樂しき！



暮るゝ山路の　假令危くも、
戀に活きたる　望あればぞ、
樂しき月日、抑もや幾何？
ア、嬉しかりしも一時の夢！
樂しかりしもうたかたの泡！

人の妬みも　我は厭はじ、
人の嫉みも　我には嬉し。
男心は頼まれぬかな！
男心は情なきかな！
髯ある男の　誓　頼まれず。
力ある男の　心　頼まれず。

名と富とには膽も融くべく。
權威の前に誓を捨てん、
容貌よき色に心うつさん、
腑ありとやいふ？利には腐らん、
骨ありとやいふ？色には朽ちん、
髓ありとやいふ？名にはあされん、
男心は　頼まれぬかな！。
男の戀は　さめやすきかな！。

露伴曰、鹿毛よ汝も傍聽せしと重ねていへる面白し。又曰、一ト向といふことを、むけるといへる、不可は無けれども悅ばしからぬ言葉のやうおもはる。

長者の娘　年　うら若く、



容貌うるはしく　美色ありと聞く。
紅粉あつく　面貌を飾ざり、
翠黛眉をうるはしく畫き、
髮膏を得て　彌々黑く、
珠玉かゞやかし、玳瑁かざる、
妓爐の煙　香りをうつし、
綾の衣は　擧動なよかに、
みがく膚は　肌理こまやかに、
山だちならぬ人のみがける、
かざれる姿、誰も羨む。

我も婦人、かれも婦人、

我に情あり　君を戀へり、
かれも情あり　君を慕へり、
戀ふは女の罪とはいはじ、
情にへだてありとはいはじ、
麗姫にのみ美しき戀あらめや、
麗姫にのみ美しき情あらめや。
戀にけじめのありとはいはせじ、
戀へる婦人を我は咎めじ、
容貌に情を變へたる男、
富みに眼のくらみし男、
男心は　頼まれぬかな！、
男の戀は　褪めやすきかな！。



我は男を　怒り咀へり、
我は男を　情なしと責む、
その秋なりき、君は失せにき。
月下にすさぶ笛の音聽かず、
君が姿を我が村邑に見ず、
我に無情君は、何處ぞ、
美はしかりし聲も得聞かず
絶えて會へりと　いふ人もなく、
あたら男を　失へりといふ。
咀へる男　惡かりしとも、
慕ひし男　豈に忘れめや！、
思ひ　思ひて　忘るゝ間なき、

我が戀人を怨むも　戀ゆゑ、
情なしと怒り　惡むも　戀ゆゑ、
今なしと聞き　我心　さわぐ。

長者の娘　君を戀ひにき、
黄金に誘ひ　榮華に釣りて、
我より奪ひ　寐取れるか、そも？
我が胸さわぎ　心もえたつ、
夜をこめ忍ぶ　長者の邸、
君を求めて　假令得ずとも、
戀の怨みを忍ぶべきかは！
辛かる思報はでや　止む？



此時　我は鬼女なりき、
此時　我は羅刹なりき！
怨みと妬み　怒りと嫉み、
瞋恚に燃えて　嫉妬に焦がれ、
怨恨に戰なく　肉　腕、
生命を賭けて結びし誓、
生命を以て報はでや　止む？！。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其四

月下に影あり、邸より出づ、
絹布の擦りあひ　留木の香り、
風に搖めく　頭の飾り、
縺れし頭髪の毛　はら〳〵戰ぎ、
紅絹の裳裾に　雪白の脛、
寢卷姿ぞ仇しどけなき。
礫　岩角　厭はず洗足、
肉は壞れて　血潮したゝり、
招く尾花に　心も留めず、
茨肌をやぶれど知らず、
後見かへり　見かへりつ　往く。
やつれし面貌　たゞ青白く、



歩み　たと〳〵　踏みさく　茅野、
頭　うなだれ　色に艶なく、
仰げば天空に　片破の月、
曇る涙の　瞼に溢ぶれ、
吐息つく時　力や失する？
憂きに閉され、悲みを抱く、
堪へぬ思ひや　胸中に宿れる？。
凄き光りの　月は傾むき、
風身に泌みて　露繁く散る。
芝踏み分けて　登る山徑、
谿に湍流の音　物凄く、

魔神の呼ぶか　梟の聲、
冷えて寂しき　猿の叫び、
風に玉散る　露けき尾花、
ハラ〳〵ハット　落葉のあらし。
塒鳥は夢に魘されて鳴く。
思ひ迫りし身か　怖れなく
辿りつきたる一座の祠、
杉の木立は　月光を黑め、
封せる苔は　露滑らかに、
玉垣頽れ　蟲の音悲しく、
神寂びませる　社壇にかゞみ、
階段の根に　額づき禱る。



木立吹く風　寂びて靜けき。
我　翠蓋と　かざせる杉に、
躱れて聽けば　身に泌む憐れ！。
怒は融けつ　妬みは失せつ、
怨み忘れて　ひた泣きに　泣く。
我に勝りし娘のあはれ！。
我に勝りし娘のつらさ！。
憐身に泌み　胸は迫りて、
思はずせき來る涙は止まず、
しやくりあげては　ひた泣きに　泣く。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

巖頭に立ち　見下ろす潭に、
碧玉融けて　波は搖がず、
魔神住めりと　聞ける深潭。
巨大の鬼の　開ける口か？
暗く窪みて　星影　すごし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

長者の娘　あはれなるかな！
死に臨む今の　最後の述懷！



聞け、すさまじくあはれならずや、
誰かは泣かぬ！誰かは泣かぬ！。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

君　戀人の　ある身とは
豫て知れども　思ひはやまず、
叱れど去らず、煩惱の犬！
戀に狂へる　我が心には、
君が姿の　消ゆることなく、
戀に惱める　我が心のうち
悶え　ひまなく　身をさいなめり。

長者の娘と生れし怨恨！
名門の子と生れし悔み！
我　眞心に君をのみ戀ひ、
燃ゆる思ひに身をやつせども、
人は黄金に　買ふ戀といふ、
財寶に誘ふ　浮氣とぞいふ、
權威に　我　君を誘はず、
富に誇りて戀を強ひんや。
されども　人は　富故といふ。
我名門に　生れし怨み、
誰れかは戀を　強ふるとはいふ？



妾に色あり　美しといふ、
容貌に　誘ふ　我戀ならず、
我賤の女と　成り果つるとも、
我は壓はじ、君肯なはじ。
我容貌やぶりて　君喜ばゝ、
我　燒小手を面にあてん、
憂きも　辛きも　戀に忍ばむ、
力なくとも　薪も樵らむ、
馴れぬ手業に　畑をも鋤かむ、
綾の衣を　襤褸にも更へ、
膚に　荒らき　風も厭はじ。
二なき生命も　君に捧げん。

されども悲し、悲しきかな！
切なる思ひも　君　肯なはず。
我戀　永久に　遂ぐる際なく、
我戀故に　狂ひ死ぬべし。
戀の惱みを　あはれとおぼせ、
戀のやつれを　あはれとおぼせ。

戀に惱める　妾をさいなむ、
ア、禍神の　絶えせぬ世かな！
領主の殿に　垣間見られて、
妾を側室に　召したまふとよ。
父は喜び、家族は誇る、



權威に　やはか　戀を捨つべき?!
權威に　豈に　戀を更へんや?!。

何故父は　喜びたまふ?
家族は　何を誇りとはする?。
形骸を飾るを　名譽とやする?
精神に殺し、何をか樂しむ?。
君　我戀を　斥けたまふ、
切なる思ひ　届くよしなし、
我は唯戀ひ、悶え苦しむ、
惱み　煩ひ　思ひくづをれ、
父はさいなみ、家族はなだむ、

權威嵩に　假令責らるゝとも、
呼吸あるきはみ　戀を捨てんや!?。
責めに責められ　假令死ぬるとも
爭かで　この戀　思ひ斷つべき?。
君在すきはみ　妾は生くべし、
よし　戀遂げず　思ひ遂げずも。
君　我生命!、君　我が生命!。
生命と絶る　君は情なく
拒む要求は　いや迫り來る。
堪へ得ぬ思ひ!、苦しむ悶え!。
妾戀ありと　知りにし領主、



何ぞ情なき!何ぞ殘酷きや!。
君を奪ひて殺せりと聞く!。
我が爲　君は　失はれにき!、
我が爲　君は　失はれにき!、
妾胸迫まり、わが心病む、
人　食のみに　生けるものかは?。
人　富をのみ　願ふものかは?。
我心より　生命を奪ひ、
我生命なる戀を劫める、
君が怨恨は　我が怨恨なる!
君が死せるは　我が戀の爲め、

無限の嘆き　何ぞ堪ふべき?!
無限の悲しみ　何にか喩へん?!。
此怨恨　何ぞ忘れん!。
この恨み　何日か報いん!。
權威に怖づる　我とや思ふ?。
殘酷に怯む　我とや思ふ?。
領主　何なる?唯土地の主、
生命の賊よ、戀の盜賊、
形骸を殺し、戀を奪へる、
生命より戀を刼める賊よ、
心に人を殺せる賊よ、
權威　何なる?何　怖るべき?。



我死を以て報はでや　止む?
か弱き婦女の　決定し精神、
怨みを抱く我を憐れめ。
靈ある御神、あはれとおぼせ!。
戀を求めて　戀を得遂げず、
權威嵩に　戀を奪はれ、
意の的を　奪はれし身を
生存へて何　樂しかるべき?
否、此恨み　何ぞ解くべき?。
戀人の爲め　怨める我を
あはれと思ぼせ　靈ある御神!。
御神あはれめ!か弱き婦女ぞ。

凝りに凝つたる怨恨報いん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

風に亂るゝ　尾花かき分け、
洗足壞れて　苔　朱に染み、
血走る眼に巖頭を攀ぢ、
嚙みきる唇　滴たる血潮、
突立ちあがり、驚破　飛ぶべく。
逆立つ眸　異樣に輝き、
亂るゝ黑髮　肩よりすべり、
燃え立つ焰か　深紅の裳、



雪の脛には　血潮の斑點。
戰なく腕　握ぎる掌、
ホット吐く息　火燄の如く、
顏青ざめて　灰色勝ちに、
眉はひそみて　肉わなゝく。
曉月凄く　淵にながれ、
葉末の露は　翻れ　閃めき、
梟の聲、　塒鳥のうめき。
青き尾を曳き　星　二つ飛ぶ。

怨みも忘れ　妬みも融けて
憐れは迫り、　ひた泣きに泣く。

すゝりあげたる　我が傍に
嘶き立つたる　鹿毛の駒。

鹿毛よ、聽け！。
我が戀人は　失はれにき、
我が怨みし人　誠心ありき、
戀の敵と　咀ひたる人、
我に勝れる　惱みはありき、
われに勝りて　苦しみありき。
人の世厭はし　人の世惡くし、
權威ある人　惡むべきかな！。



權威嵩に　戀　遂げんとし、
權威嵩に　戀　もてあそぶ、
わが戀人は　犧牲とはなりぬ、
人の世辛らし　人の世情なし。
鹿毛よ　汝も人の世咀へ！。

わが恨み、わが惡み、
我世の中の　か弱き婦人の
戀に惱める　ものを救はん。
戀にやつれし　ものを護らん、
權威かさに　戀　遂げんとし、
黃金を餌に　戀　釣らんとし、

戀の至誠を　たゞ弄ぶ
たはれ男を我は咀はん、
誰れか　婦人を敢果なしといふ？。

聽け、鹿毛よ！。
汝も穢れし其身を捨てよ、
われは形骸を淵に沈めて
靈　永久に　人の世咀ひ、
われ亡骸を水に融かして
靈　永久に力をあらはし、
戀に惱める女に　戀を、
思ひやつれし女に　戀を、



叶はぬ戀に悶ゆるものに、
戀を遂げしめ　喜ばしめん。
鹿毛よ　汝も我と死ねかし。

底なき淵の　靜けき都、
水の底なる　樂しき住居。
長者の娘　淵に沈み、
われ　賤の女も淵に沈み、
鹿毛よ　汝も淵に沈み、
榮華に誇る人の世咀ひ、
權威たのむ　人の世咀ひ、
財寶に眩む　人の世咀ひ、

底なき淵の靜けき塲所に、
水の底なる樂しき鄕に、
わが戀人を　われは追はなん！

誰か、婦人を敢果なしといふ？
靈　永久に神止まりて、
月の傾く空に　鈴の音、
猿の叫ぶ夜半に　歌はん！
われは望まず　浮世の榮え、
よし　三熱の苦しみありとも、
よし　熱湯を身に濺ぐとも、
よしや　猛火に身を焦がすとも、



戀しき君の跡を追はなん！
いざや　鹿毛よと、ヒラリと乘れば、
鬣ふるひて鹿毛は嘶く。

天を仰ぎ、月　さし招き、
鬢のほつれの髮をそよがせ、
鐙蹈張り、怨みの眼。
榮華を咀ひ、權威を咀ひ、
人の世咀ひ、財寶を咀ふ。
招く手に散る落葉の嵐、
どつと山風　梢に喚き、
魔神の叫びすさまじく鳴り、

梟は肉に飢ゑて呼び、
猿は月に冷えて叫ぶ。

長者の娘、いざや　共にと、
切り立つ崖に馬を乗りあげ、
手綱かい繰り躍れる刹那！
巖頭離れぬ、長者のむすめ。
怨みは盡きじ、永久なる！。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

水烟り、波たちさわぎ、
鈴の音、月の夜毎、



歌の聲、月の夜毎、
緒名が淵、緒名が淵、
怨みは深し　底なしの淵。

露伴曰、末節五行、言辭の絢爛無くして、しかも意遠く情饒し。悅ぶべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其五

巨巖に　千歳の　苔衣あり、
溪流に　不斷の　鼓のしらべ。
高く削れる懸岸端に

年々開く　山吹の花、
黄金の色は　風に搖めき
花片　水に　輕々と浮く。
暗き綠の　樅は　枝古り、
赤みばしれる　杜松　茂り、
岩の虧隙のなに忍ぶ草、
卷柏青く　岩角かくし、
紫　匂ふ　鬼薊草、
巖の上下　まつはる蔓、
夕闇染めぬく葛花　白く、
下には碧し　底なしの淵。
崖を飛ぶ瀧　白布さらし、



白龍跳り、銀線みだれ、
飛沫散る時　霧　舞ひ起り、
草の葉末に　白玉　宿る。

空燒く雲の　峰つくる時、
熱沙焦がれて　烟を起し、
獸　樹陰に喘ぎをやめず、
鳥は虛空に　翼を搏たず。
樹は葉を垂れて　熱きに弱り、
草は萎びて　いきれ　香　高し。
暑に惱むもの　來り見よ、
熱に倦みたる　人來て憩へ、

此に新しき生命を得べく、
朝の汝に　甦るべく、
松に　颯々の　聲を樂しみ、
淵に蓼々の　水音を喜べ。

蔦紅葉散る　秋の夕に、
烏瓜赤く　崖に殘り、
欅の黄葉　黄に榮えて舞ひ、
錦木赤く　實を止めて散り、
淵には映る　黄葉のにしき、
淵を埋むる　落葉のあらし。
隱れし巖　あらはに峙ち、



骨立つ木々は　風に喚けり。

玄冬の朝、飛沫草に凝り、
白珠の飾り　枝に貫き、
白き管玉　朝日に輝き、
白き曲玉　碎けては散る。
素雪の夕、吹雪は亂れ、
巖角蔽はれ　岩ばな隱れ、
眞白き鄕に　綠濃き淵。
卍字の狂ひ　梢に花咲き、
巴の舞ひは崖に文字書く。

誰かは此處を　よしなしと見る？。
天の巧みは　此處に誇られ、
地の怪しさは　此處に衒はる。
底なしの淵　何ぞ靜けき！、
高き巖の　何ぞ崇高き、
千歳の巨巖　姿を變へず、
不斷の鼓　音を　絶えず鳴る。
誰れか巖を　常なしと見る？
不變の姿！　常住の樣？。
永久なる　苔蒸す巖、
朽つることなき自然の姿！、
誰れかは否む？　誰れかは否む？。



崖の上なる祠は朽ちぬ。
扉けし飛び、檐傾きぬ、
梁くじけ、棟は折れぬ。
滅ゆべき祠新しくなり、
朱の玉垣　色鮮やかに、
棟に鰹木、千木　高知りて、
祠朽ちては　三度　新に。
春の祭禮、秋の祭禮
願言運ぶ乙女　幾人？。
願ひ叶ひし乙女　幾人？、
日邁き、月過ぎ、年は幾年？。

誰か思はむ？　誰か料らむ？。
秋の夕の蒸し暑つき夜半、
星鮮かに輝ける天、
風なく澄みて、高く　清けく、
猿の叫び　腸を斷ち、
鹿の鳴き聲　尋常ならず。
この夜　星飛び　そら物凄く、
うごめく如き怪しき呻り、
山に答ふる　どよめく響き！。
俄然！天地も崩るゝ響き、



塒鳥さはぎて　羽搏き　高く、
獸愕き、　跫音　亂る、
水なき谷に　流れ漲り、
瀧なき淵に　水たぎ飛べり。
松捻れ折れ、巖は碎け、
懸岸崩れ、淵は埋もれ、
瀧なく――淵なく、
岩なく――樹なく、
草なく――苔なく、
底なしの淵、今は　何處ぞ？
聳えし巖、今は何處ぞ？
瀧りし瀧は、今は　何處ぞ？

常住と見し淵は埋もれ、
不變と見えし巖は崩れ、
緒名が淵、誰れか今見む？
緒名が淵、今は何處ぞ？

底なしの淵　岩に埋もれ、
常磐の老松　折け仆れぬ。
朽ちにし祠　たゞ新まり、
戀の願言運ぶ乙女等、
今も絶えせず、今も絶えせず。

人の思ひ、人の咀ひ！



切なる願の　業の力、
執着永く　浮世に殘り、
今も絶えせぬ乙女の願ひ、
緒名が淵、埋もれたりとも、
執着　永く　世を咀ひ、
戀　世の中に絶えぬきはみは、
思ひ殘らん、永業なる！　（完）

# 降魔頌

## 第一篇

### 其一

佐保姫　來ます、佐保姫　來ます。
野山の　かぎり　目も　はるぐと
染めて　仕立つる　萠黄の　ころも、
黄に　紅に　花を　飾りて。

根越し　山越し　そよ吹く　風に、
青き寶冠の　下もる　髪を
さらり　さらりと　緩う　靡びかせ、
佐保姫　來ます、笑みを　含みて。

玉の膚　蔽ふ　綠色の天衣、
輕く　搖動く　天帶は　雲　ひき、
朱鷺色の戸帳に　洩るゝ香　淡く、
烟　碎けて　空に　たゆたふ。

轅に　かけし　白き若駒、
鬣　ながるゝ　紅絹の　漣、



振ふ尻尾に　紅色の瀧、
蹄に　ゆるく　かげらふ遊ぶ。
姫の御車　雲上に　輾れば、
草木　長夜の　睡眠を醒ます。

樹木の吟

冷たき床の　夢のうち
覺ます　優しきさゞめ言、
柳　憂ひの　眉　開き、
梅は口紅　さして笑み、
櫻　嬉しく　ほろゝ醉ひ、
嫩芽は　梢に　枝に　ふき、

自然　浮きたつ　心かな。
長き睡眠の今ぞ醒む、
長き睡眠の今ぞ醒む。

艸の吟

長き睡眠の　夢のうち
さゝやく　春の風の音、
纈纈結ぶ　たんぽ花、
紫紐を　解く　菫、
穂に出で笑ふ　鬼薊、
野を吹く風の　優しくも
撫でゝ　育つる　甘き雨、
長き睡眠の今ぞ醒む、



長き睡眠の今ぞ醒む。

姫の御車　海に輾れば
長閑かに霞み　うら〳〵と晴る。

鷗の吟

浮き寢の　假の夢のうち
さゝやく　春の　音信に、
水づく鷗の腹　暖くみ、
沖津島山　霞みこめ、
白帆に孕む　風　輕く、
千鳥の舞へる　波の上、
晴れて　嬉しき　海の色。

長き睡眠の今ぞ醒む、
長き睡眠の今ぞ醒む。

姫の御車　山に輾れば
谷水　ぬるみ　緑を融かす。

山神の吟

冷たき床の　夢のうち
嬉しき　姫の　さゞめ言、
うつゝ心の　夢　醒めて、
谿流は　洗ふ　苔の髯、
雪の冠の　紐とけて
緑の髪に　若がへる、



心　ときめく　風の音
ぬれて　嬉しき雨　纖し。
長き睡眠の今ぞ醒む、
長き睡眠の今ぞ醒む。

姫の御車　野面に輾れば
花の轍に　胡蝶は狂ふ。

胡蝶の吟

長き睡眠の夢のうち
嬉しき姫に　はぐゝまれ
うつゝ心に舞ふ　胡蝶、
羽に　金銀　綺羅　飾り、

雕ばむ　珠玉　色　映へて、
輕く　ひら〳〵　花に舞ひ、
晴れて　虚空に　とも狂ふ
翼に　青き　風　ひかる、
長き睡眠の今ぞ醒む、
長き睡眠の今ぞ醒む。

蜂の吟

長き睡眠の　夢のうち
さゝやく　風の　音信に、
眠り醒めたり　春の朝、
羽音　うならせ　花に飛び、
蜜を集むる　樂しさよ。



活動　覺むる　甦り、
誰か　仰がぬ　この恵み。
長き睡眠の今ぞ醒む、
長き睡眠の今ぞ醒む。

姫の御車　戸帳揭がれば
鳥は香に醉ひ　光りに歌ふ。

禽の吟

冷き　冬の　夢のうち
さゝやく　風の音づれに
澁りし舌の　滑らかに
繙とく　花の法の文、

燕、旅路の　物がたり、
頬白　文章の　つゞり鳴き、
夫婦雀の睦び言、
三光稱ふ　四十雀、
晴を喜び　花陰に
唱ふや　春の日和歌。
うれしき風の　音信に、
古巣を出でゝ遊ぶ禽。
長き睡眠の今ぞ醒む、
長き睡眠の今ぞ醒む。



## 其二

青き寶冠　綠色の天衣、
天帶　ゆるく　風に渦畫き、
釧　輝き、環は光る、
天　新しく　うら〳〵霞み、
地は新しく　美々しく飾る。

人　平和の光明にうたれ、
和樂の音に　心をとられ、
凞怡の香に　敢なく醉ひて、
樂しむ　此處の　愛しき花園、
喜ぶ、此處の　奇しき音樂。

馬奴の薫らす　煙草のけぶり
ゆるく　なびきて　消ゆる　彼方に
畑打つ　人の　鍬の手　輕く、
流れに　かぐみ　芹つむ　女
向脛　白く　水沫　よどめり。

蜂の　うなりは　花より　花へ、
虻は　鼓翼ちて　空中に　とゞまる、
麥畑　青き波　うねり行き、
雲雀の歌は　雲よりこぼれ
燕の往來　高く――低く。



ゆるめる流　いさゝ小川の
玉藻のひまに　魚　群れ　遊び、
河添ひ柳　ゆらゝ　ゆらゝ
風に　まかせて　亂れつつ　靡びく
かげに驚き　胡蝶は狂ふ。

双胡蝶の　狂ひ舞ひ
童男　捕らふと　追ひ　追ひせまる、
追へば　舞ひ立ち　舞ひてはとまり、
黄金の光　まばゆき翼、
ゆるく　舞ひ　舞ひ　高く舞ひ行く、

蝶の行衛を　目も　はる〳〵と
童男　見送る　草を褥に、
目光は　うら〳〵と　光り　長閑く、
若葉の匂ひ　こぼれて輝し
童男の瞼　うと〳〵　重もる。

胡蝶の羽音、黄蜂の　うなり、
童の耳に　奇しき樂の音、
眠れ〳〵　と　子守歌うたはれ、
ふくら　肥へたる　柔手臂を
曲げて　萠黄の　若草褥。



輕く吹く風　裳を拂ひ、
こぼるゝ　紅葉　春若葉、
肥へて　よき色、片頰の靨、
笑むか　口邊　筋　ゆるく
紅を莟みて　唇　結ぶ。

あはれ　優しき　小さき胸の
安けく　眠れる　童の夢は
四邊を　舞へる　蝶をや　夢む、
暖たき　母の　乳房や　夢む？、
色　とり〴〵の花をや　夢む？。

誰れか　童の可怜眠りの
安けきを見て　羨まざるべき？
此時　何の　煩ひかある？、
此時　何の　苦しみかある？
此時　何の　汚穢やはある？。

花は　童男の　睡顔をかざり
蝶は　童男を　周りて狂ひ
蜂は　童男の　耳にさゝやぎ
鳥は　童男の　眠りに歌ひ
姫は　童男の　邊に立てり。



美し童男の　長閑けき睡眠、
花に　色あり　匂ひ　ありとも、
鳥に　妙なる聲は　ありとも、
蝶に　眩ゆき翼　ありとも、
童男の夢に　など　及ぶべき？。

羨ましさよ　童男の眠り！
神の御使　無我なる童男！
永久に安かれ　可怜童男！
童男の睡眠　安けきを見て
嫉み　妬める　大魔王。

## 其三

天地を生めり　はぐむと誇り、
世界　我が儘なりと　思へる
彼れ大魔王　高く　あがりて
下界　見下ろし　平和を妬む。

破旬　一搖り　身を搖れば、
御車　駐まる　雲の上
白き若駒　立ち　すくみ
足搔かず　嘶へず　風に悲しむ。



色褪せ　破ぶるゝ　綠色の天衣、
寸々　裂け散る　淡紅色　戸帳、
天帶　ちぎれ　瓔珞　ほつれ、
環　碎けて　釧　折れ　散る。

魔神の息吹き　暴風を起し、
霞は絕へて　烟　ちぎれ、
吹雪くや　萬朶　花の雲、
小鳥　潜まり　歌はず　鳴かず。

綺羅　榮え　飾れる　金銀の
翼　やぶられ　胡蝶　嘆き、

朝彦影に　羽を　うならせ
蜜をあさりし　黄蜂悲しむ。

梢にうめく　木の芽の叫び、
葉末には　泣く　若草の聲、
童男　魘され　夢　破れ
怖え　恐れ　胸も裂くべく。

下界　荒れたち　破旬喜ぶ、
頬をゆるませ　ニタリと笑める
あら　もの凄き　彼が顔ばせ！
あな　もの凄き　彼が眸！、



## 其四

血潮に醉はん　肉に飽かんと、
三つの眼に　下界を睨らみ、
刺たつ茨の　十字の笞に
七寶瓶の　酒を浸して
揮ひ　揮ひて　四方に灑ぐ、
あな　凄まじき　破旬が呪ひ！

洒ぐ　無明の酒の香に
汝等　醉ひ伏せ　醉ひ暴れよ、
爭ふものは　我眷屬、

酔ひ伏すものは　我餌食、
君は　疑へ、臣下は　怨め、
夫　たはれよ、妻　妬め、
父　子を捨てよ、子　父に背け、
朋友より　友情を賣れよ　盗めよ、
強きは　強ひよ、長きは　卷けよ、
重きは壓せよ　剛きは迫まれ、
高きは誇れ、富めるは驕れ、
卑しきもの　永久に蹲へ、
貧しきもの　永久に飢えよ、
自由求むる餓鬼よ　聞け、
我に笞あり　刺茂くあり、



我　鎖あり　長く　重し、
正しき　直き叫びをなすもの、
義ある　情の深きもの　聞け、
我に無明の美味酒あり、
我に蜜あり　甘く毒あり、
我に鉾あり　鋭く尖る、
我に剣あり　焼刃は匂ふ、
酒を嫌はゞ　蜜を與へん、
蜜を厭はゞ　鉾を與へん！、
蜜か？　酒か？　鉾か？　劔か？

刺ある茨の十字の笞を

揮ふ　虚空に　酒　霧と散り
毒ある蜜は　雨の如　降る。

## 其五

下界の平和　攪き亂さんと、
天降り立ちたる　魔破旬の
身體延せば　長　百由旬
胸に　雲　湧き　霧　たちかくし、
灰色　流がし染めたる大空に
薔薇色なる　北光　凄く、
月なく　日なき　塲所の光明と



おぼろに照らす　常闇の國、
氷雪　堅く　閉せる平野、
吹雪のあらし　絶間なみ吹き、
粉雪　地を捲き　虚空を蔽ひ、
濛々く　漠々く　眼は眩む。

巍々たり　峩々たる　氷山峙ち
磊々く　落々く　氷塊轉ぶ。
國に河流なく　湖もなく、
氷たゝみし　氷の世界、
氷の柱、氷の扃、
氷の甍、氷の樓、

檐には　氷柱　垂氷を飾り、
棟に　氷の大擬寶珠、
財寶に眩む　人の眼を
迷はし飾れる　水晶殿、
北光　輝せる　魔王宮。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

破旬　身を搖り　身を變らせて
暫時　扮せる　法師の姿、
邪見　嫉妬の角　かくす
人目　あやなす　黒頭巾、



貪り飽かぬ　鷲の爪
深く藏せる　墨染衣、
肉　嚙み裂かん　狼の牙
すぼめ　包める唇　朱く、
血を舐すらん　二叉の舌
口にかくして　仁慈をかざる。

手にせる笞　十字の形、
優しく裝ふ　忍辱の
聖者と　まがへる　ゆかしき身扮、
歩み　なよかに　言葉　やさしく
亂れしを見て　顰ます眉に

見はし　かざる　憂　嘆き。

疲れに疲れし　彼等　人の子、
救濟を垂る〻　聖者とあがめ、
憐愍　求めて　袂にすがる、
背　かい撫で　顔　背向け　笑む。
その笑み　何ぞ　物すさまじき！
その笑み　何ぞ　凄く　あやしき！

破旬が揮ふ　笞よりしぶく
無明の酒に　酔ふものを見よ！
酔ふて　呑みて　足もと亂れ



精神眩みて　泣き　喚めき　呼び、
怒り　猛けり　爭ひ　鬪めき、
やがて　麻痺れて　心失ふ。

破旬が揮ふ　笞より　滴る〻
蜜　舐りて　苦しむを見よ、
心　亂れて　眼　くるめき
四肢　麻痺れ萎へ　舌釣り　澁ぶり、
息づき　あらく　胸　張り　迫り
悶え噪ぐを　知らず顔なる。

酔ひ伏すものに　近づく破旬、

袖に裏める　利き爪　延ばし、
絹裂く音たて　膚を破る、
滴たる血潮　掌窪め
舐ずる　裂けたる舌のはたらき
菅燒く焔の　燃え立つ如く。

血に酔ふ　破旬が齒がみの音に
醒めて　跪がきて　噪ぎ　罵る、
噪げど　足痿へ　腰立ずして
掌合はせ　拜ろがむ　嘲み
ニタ〳〵　微笑む　破旬が笑顔！



血に飽き足らず　肉を嚙み食ふ、
飽くを知らざる　口　廣く裂け、
財寶を掠め、黄金を奪ひ、
平和滿てる　野に火を放つ、
火花　紛々　焔は狂ひ、
天蔽ふ煙　眞黑く　暗く、
喚めき、叫び、泣き、悲しみ、
咽び、苦しみ、逃げ　迷ふ。

破旬　勇みて　魔扇に煽る
怒り　擴がる　焔　渦卷き、

猛火　炎々　立ちては崩づれ、
住居　焼かれ、財寶　奪はれ、
田畑　野山に　青きなく、
黒き野原に　黒き山岳、
黒き都會に　黒き村邑。

野に泣く聲に　破旬微笑み、
焼野に迷ふを　鐵鎖に繋ぎ、
餓鬼よ　喚くを止めと　笞つ、
茨の笞に　皮裂け　破れ、
肉　笑み　ちぎれ、血まぶれて飛ぶ、
肉團　肉塊　散り　亂だる。



血に飽く破旬の　息吹きの狹霧、
天津日影を　立ち籠め　かくし、
日なく、月なく、
晝なく、夜なく、
大空　灰色に　破旬が放つ、
北光　おぼろ　うすら　明るき
氷の里に　氷の住居、
冷たく　堅く、情なき國と、
人々　悲しみ　破旬樂しむ。
聲　腸を斷ちて　悲しく、
風　腥さく　うら寂びて吹く。

氷の宮に　集めし財寶、
滿ちに　滿つれど　破句は飽かず、
日なく　月なき　常闇の國
廣しと雖ども　破句は飽かず、
光明なき世の　光明なき國
唯　北光の　うすら明るき
海なき國に　破句は飽かず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

## 第二篇



### 其一

東の國　海の幸あり、
山の幸あり、財寶に富めり、
黃金延べたる　太きみ柱、
白銀打ちなす　しきかはら、
河原の砂　夜光る玉、
海濱の眞砂は　車渠　珊瑚
赤珠　眞珠の　光りを綺へ、
谿に　水晶　瑠璃　瑪瑙、
野邊の千草の　常夏綠

凋はぬ木の葉　常盤木の
枝の緑葉　紅葉を交へ、
花は菓實を　合へ觸へ　咲き、
稻　八束穗に　登り豐けく、
魚族　寄る海の波は靜かに
海底に數ある奇し寶貝。

錦積み去る　千船　百船
舳纜　ひもとき　艫纜　つなぎ、
波に　帆のかげ　梶の音絶えず、
綾を積み來る　車　千輛、
馬の嘶き、轍の響き、



荷の緒を堅め、常に絶えせず。

聞いて破旬の心は動き
たちまち　やつす婦女の裝ひ
紅粉いろどり　牙をかくし
もとの姿はつや〳〵見えず、
自づから向へる鏡を訝かり、
打置く鏡の　名殘を惜しむ。

羅綾の裝ひ　爪を潛め、
裳のさばきに　蘭奢の香り、
つらぬきとめし珠玉の瓔珞、

色よき華鬘　目もあやに、
天津乙女の　優しき姿、
鮮血染めたる唇　すぼめ、
流盼いとゞ　なまめかしくし
財寶を傾け　城を傾け
國を傾けしめんと企む。

瞿粟の艶なる　花の裝ひ
阿片の毒を　身に藏くす、
目醒むる色ある毒茸の
魔女往くところ　男惱まし、
止まるときは　魅らし仆す。



勸むる酒の香に迷ひ、
微笑む色に　魂を消す。

魔女往き到る　東の國、
河を距てゝ望む　彼方に、
瑞氣　山を罩めて棚引き、
祥雲　海を越へて飄ひ、
輝く甍は　紫紺の鱗、
磨ける楣は　色ごる霞、
魔女　愕き　且つ喜ぶ。

財寶の國の　境の門を
嚴しく守護りて龍蟠まる、
莊嚴し角の頭飾り、
長髯　垂るゝ　銀の鞭。

蜿蜒として臥す　山より山へ、
逶迤として横ふ　谷より谷へ、
漆黑の鱗　鋼鐵の爪
ア、　嚴しき大黑龍。
魔女は愕き　暫時　躊躇ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊



## 黑龍の吟

南と北の境ひせる
我黑龍の　姿　見よ。
西に　震める　山の奥、
人類の通路　絶えし谷、
涯際なく　廣く　廣き原。
玆に黑龍　蟠まる。

東の極み　率土の濱、
胡砂吹く風の　身ぞしむ。
涯際知られぬ　大野原。

茲に黑龍　蟠まる。

此奥は　財寶の御國、
此奥は　財寶の都會、
此境　鐵の門
茲に黑龍　蟠まる。

財寶窺ふものを堰き、
穢きものに汚さじと
守る　財寶の國の門。
茲に黑龍　蟠まる。



## 其三

楯より堅かれ　我が鱗、
鉾より鋭かれ　我の角、
爪を磨き　牙を研ぎ、
茲に黑龍　蟠まる。

常磐の守護　惰らず、
堅磐の嚴護　撓みなく、
財寶の國の　門守り、
茲に黑龍　蟠まる。

魔女が濺げる無明の酒に
溶いて流せる　毒ある蜜の
芳香に迷ひ　飽まで醉ひて、
眠り倒れて　黑龍起たず。

魔女　取り出だす　鋼鐵の鎖
七重に縛り　七重に繫ぐ、
黑龍醒めず　守護　失ひ、
財寶の國に　魔女入れり。

魔女が靨は　人を惱まし、
糾々たる武夫　力を喪ひ、



堂々たる大臣も　眼を眩まし、
堅城　鐵壁　笑めば陷る。

朝に奪ひ　夕に掠め、
魔女　流盼に　劫めし財寶、
千車に積みて　送れど　盡きず、
されど　貪慾　なほ飽き足らず。

路遙なる　寶の都、
守護堅かる　寶の都、
遠く望みて　盛んに起る
破旬が　飽かず貪る心。

内心の悶えは　外面に現はれ、
何時しか現はす　彼が　本相。
艶にうたれし人は　戰き、
美に迷ひたる人は　慴伏す。

破旬　爛々く　眼　光らせ、
手にせる茨の笞を揮ひ、
毒酒を灑ぎ　彈き　灑ぎ
咀ひに　咀ふ　財寶の國を。



## 其四

### 破旬が吟

我が往くところ　氷り　堅まり、
我が住むところ　氷り　疊まり、
我嘯けば　吹雪を起し、
我息吹けば　暴風　荒れ立ち、
我あるところ　常闇の國。

海に巨浪　天拍ち　躍り、
掀る方には　銀山　峙ち、
飜へる時　船　くつがへり、
磯に寄る波　巖に碎け、

沖に立つ波　丘陵と崩る。

日に光りなく、熱りなく、
月はさやけき光りを失ひ、
冷く　堅く　常闇にして、
うすら明りの　おぼろ〳〵と
わが　北光の光りあるのみ。

鮮やけきなく、明るきもなく、
彈く絲の音、吹く聲もなく、
喊つくる聲、矢叫びの聲、
劒　劒と　相うち　響き、



鉾と　鉾と　相觸れ　閃く。

韓紅の　血の河　流れ、
積み累れる骨　丘と築き、
人々戰き　悲しみ　怖れ、
頭　擡げず、唯　蹲ひて、
聲を得立てず、荒き息せず。

財寶さかりて　財寶あつまり、
富める　我に及ぶものなく、
力　我より強きものなく、
我が權威に　慴伏さぬなく、

我が心には　逆らふものなく、

所有人類は　皆　我が眷屬、
所有土地は　總て　我が領土、
誰れかある　我を抑ふる？
誰れかある　我を阻むる？
誰れかある　我に敵する？

揮る杖に　氷れ　この土地、
揮る杖に　降れ　降れ　粉雪
揮る杖に　起れ　暴風
揮る杖に　暗め　常闇、



揮る杖に　亂れよ　人心！

小賢しき人の巧智、
小賢しき人の世の道德、
小賢しき人の法度、
小賢しき人の敎訓、
氷らせ、吹き去り、埋め去らん！

慴伏すもの　我に從へ、
恐るゝもの　我を崇め、
悲しむもの　我を拜め、
我が笞の　怪しき力に、

魅らせ、醉はせ、仆し去らん！

眼あり、耳ある輩、
知らずや　我に鎖あり、
我に劔あり、我に鉾あり、
我に酒あり、我に蜜あり、
我に怪しき力あるを。

我世界を氷に閉ぢさせ、
冷く　堅く　情なきものとし、
光明を奪ひ、常闇となし、
總てをとりて我所有となし、



なべてを從へ　我民となし、
常闇知らす　闇つ御帝と
堅氷御座を　永久に据ゑん、
氷の宮の　冷たき床に。
從はざらば　劔あるのみ！
まつろはざらば　鎖あるのみ！

## 其五

破旬　茨の笞揮り　咀ひ、
息吹き　嘯き　高く招けば、

磨ける珠玉　光澤くもり
金銀　きらの光りなく
色褪せ　萎み　花は散る。

どつと　吹きたつ　颯風、
石　飛び　砂　捲き、
樹を折り　荒るゝ
海原　高く　浪たち噪ぎ、
地をまく　吹雪　どう〳〵、
天　暗く、地は黑く、
暗夜に劇しく風　喚めき、
腸絞りて　人は悲しむ。



破旬　突立つ空に　北光
弓とたはまり　映れる光り、
光明なき世の光明と仰がれ、
氷り凍てたる峰を峻がしみ、
氷り閉ざせる野は廣濶と、
青葉なき枝　骨立つ幹に
かゝる狹霧の氷り　光れる、
劔　逆立ち、鋒列び立ち、
相映り合ひ　亂だれ閃めく。

峽　峽に　銀龍のたり、
谷にかゞやく　惡魔の眼、

見れば　膽裂け　魂　身に添はず、
股は戰き　背　冷く、
顎わな〳〵　言葉　しどろに
地に蹲踞ひて　救助を禱る。
破旬　喜び　冷かに笑む、

習々として　吹風　氷り、
漾々たりし　流　堅まり、
百囀りの　小禽　潜まり、
白鳥の叫び　闇を劈ざき、
豺狼　凍えて　雪に吠ゆる
聲　冴え　響き　凄じく鳴る。



晝なく　夜なく　常闇のうち、
薄ら明りの　うすら明るく、
天　灰色に　北光ひかり、
寂びて　音なく、
啜り泣く聲、
忍び音の聲、
破旬喜び　獨り樂しむ。

人々　貪り　慢り、奪ひ、
欺き劫め、誑かり盜み、
相搏ち　傷つけ、犯かし、鬪ひ、
惡くみ、爭ひ、疑ひ、妬み、

親しみなく、愛しみなく、
情なく、思ひ遣りなく、
惠みなく、敬ひなく、
相和らがず、相睦ばず、
聲　あらゝけく、眼　角立ち、
心　さがしみ、行　むごく、
堅く、情なく、冷たく、辛く、
銷繋がれ　笞に鞭たれ、
氷河に凍へ　すゝりなく、
痛ましの聲　凄まじき樣。
破旬　劔と鉾と鎖と



茨の笞を　引つけ飾り、
聞きては笑ひ　見ては樂しむ。

其　六

天に日月の　光明なき國、
地に温熱なき　氷の世界、
虐げ迫まる　冷酷き都會、
相搏ち　相噬み　爭ふ土地、
此に破旬が　魔王宮、
滿てる財寶の　光り眩く、
冷たき光　目を射る劔、

破句　世界を我所有と
勝ち　誇りたる　我心高く、
苦しみ叫ぶを　心地よげに、
見ては樂しみ、　歡び誇り、
心　足りてか　眠　催す。
寂びて聲なき　山間に、
夜風に　氷る寒月の
青く　輝せる　池の面、
寂びて　靜けく　凄き如、
破句が眠り　安く　靜けき。

破句が睡顏を　蔽ひかくす、



蓬と　亂だるゝ髮の生際、
蓮の華蒼　夏の朝の
そよ吹く風に　はらり　搖ぎ、
白き　赤きが　咲くが如、
一座の瘤の　高く膨らみ、
次第に　高く　高まる　間なく、
あなや！
皮裂け　肉笑み　破れ、
烟の如く　狹霧の如く、
すつと　出たる　一人の天女、
ほがら〳〵と　明けゆく　朝
海原越して　青島かげを

見えつ　かくれつ　走れる船の、
風を孕みて　眞帆　片帆、
朝日に　色の添ふ如く、
露のけがれを止めぬ姿。

冬の林に　降る雪を
うけて　眞白き　鶴裳の
輕き天衣の　袂をかゝげ、
右手につまめる　莟の花の
綻びかけし　一片を
そと　接唇けて　にッと笑む。
たとへば　晴れし春の日影に



花の香に醉ふ　胡蝶の休み。

天女　やんをら　頭を擡げ、
眄優しく　破旬を見上げ、
廣き平野に　ゆたり〳〵と
恐れなく　慮なく
群れつゝ遊ぶ　象の草蹈む
歩みなよかに　左手に裙とり
何をか　夢みる　破旬が方へ。

爾時摩酸首羅天王於大自在天上與諸天女前後圍繞神通遊戯作諸伎樂忽然之間於髮際中化出一天女顏容端正伎藝第一一切諸天無能勝者云云
（摩酸首羅大自在天王神通化生伎藝天女念誦法）

## 其七

### 伎藝天女の吟

嫉妬、貪慾、瞋恚、憍ぶり、
慚愧なく、誇る　穢れし心に
潜み　宿りし　我は　生れぬ。

めぐく和らぐ心の裏に、
樂しみ極まる心の中に、
我伎藝天　生れ出でたり。



善なりと　我をな言ひぞ、
惡なりと　我をな言ひぞ、
自づから知らず、善しとも　惡しとも。

我が神業の伎藝のあとを
たどり見ん人　善からば善かれ、
惡しからば　惡しくありなん。

見る人々の心の文を
織るべき縁　我結ぶ、
我が神業の工巧のあとは
自然なる人の心に

潜み、秘める　手琴の絲に
觸れて微妙き音に響く。

心の奥に我が神業を
秘め宿せる心なきもの、
我が神業の工巧を見ても、
響かじ、鳴らじ、歌はじ、榮へじ。

人の心の滿潮時に、
起る波音　波のいろ、
其音うつすよすがある人、
其形容寫すよすがある人、



其色うつすよすがある人、
其文うつすよすがある人、
我　其人の心に移り、
我　其人の手に移る、
斯くて始めて工巧現はる。

心に移り、手に移らず、
手にのみ移り、心に移らず、
この時　生命なきものとなり、
この時　形體なきものとなる、
かくて　工巧は　圓滿にあらず。

心に工み、手に巧み、
文を荷ひて　形體來る。
文ある形體　見る人の
心に映る藝術者の心、
此に眞誠の工巧現はれ、
此に眞誠の文ぞ備はる。

見ん人々の心の奥に
秘める奇しき文に觸接れば
藝術者の心の文此に榮え、
藝術者の心の文此に生く。
見よ、我が工巧の花の色を、



見よ、我が工巧の文の榮を。

## 其八

天女　右手なる花　振りかざし
擡つ　花片　ひら〳〵　舞ふや、
五色いろどる　彩雲のうち、
管絃手にし　數多の天童、
蟬の羽衣　袖ひるがへし、
奏づる琴の　絃の音　遠く、
山の端ゆるく　たゆたふ雲の
離れず、去らず、動かず、消えず。

大絃　ゆるく奏づれば、
雲のはづれの　綿つむぎ
炊ぐ釜より湯氣たち　たちて
靡きて崩れ　崩れて動き
ゆるく搖られて　山を離るゝ。

調ぶる曲に水湧き　流れ
風　吹き起る　絃の上、
谷を湧き起つ雲みだれ
ちぎられ　もまれ　山覆ひ　かくす。
山頂　現はれ——中腹　隱れ——
麓の半　蔽ひ——隱す。



龍は悲しむ　雲の上、
鶴は嘆かめ　飽かぬ別離を、
流れ去りにし長雲のあと
短き　小さき　雲の飛び〳〵
ゆらゝ——ゆらゝと風に隨ふ。

箜篌　冴えて響く時、
和し　調ふる鐘鼓のひゞき、
玉を含みて鳳凰　歌ひ、
錦かざして孔雀　舞ひ立つ。

嘈々の響き　瀧津瀨川の

岩にあたりて躍る如、
小指に起る　絲の波、
ゆるき調べは　春の野に
鳴く黄鳥の　聲も長閑かに、
促しき奏では　秋の山風
峰より谷へ落葉を拂ふ。

堰かれて咽ぶ流の曲に
駒は秣をすてゝ食はず、
忽ち和らぐ　春の調べ
慍りを解きて　歡び　樂しみ、
霞は斷えて　山の端　青し。



切々　私語ぐ　後朝の雨、
岩間たばしる　とく〳〵の聲、
悽々　寡婦を泣かす　想夫憐、
嘈々　胡馬嘶く　出塞曲、
弓弦ひゞき、鏑矢なる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

天女　袂を　サと拂へば、
天童の袖は　胡蝶の翼、
翳ざす黄金の眩ゆき光り、
天帶靡き　雲引き　亂れ、

露の裳の　捌きに　鳴るや
五百津御統　相觸るゝ音。

飛ぶや　燕のスッと來て、
戻るも早き　身の振舞、
狂ふや　蝶の羽に觸るゝ
光　流れて　珠　轉び、
香は散りて　領巾ぞ飛ぶ。

柳の腰の　風に　しやなゝ、
くるりと廻ぐる　鳳の舞、
背向顧く　鶴の振り、



羽衣　かへりて　風に流れ、
いろどる　霞　錦のみだれ、
降るや　白雪　玉の粉ちらし、
足蹈み　とぶろ　雷より早く、
電光　あざむく　身のとりまはし、
指す手　引く手の　變りも早き、
あな！面白の　舞の手振りや！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

天女　手をあげ壁を指す、
天童やんをら繪筆とりて
灑ぐ丹青のいろどりあやに、
春風吹かず　春雨降らざる

冷たき壁に　春はおとづれ、
花　咲き亂だる〻萬朶の梢、
小禽　友呼びつれ　歌うたひ、
頭髪の　亂れを梳く柳、
ぬるむ流に　水禽遊び、
海濱に釣する海女の子等が
擡ぐる竿に　鱗は光り、
青波よする壁の面、
春風渡たる　氷の里に
霞を帶びて　山笑ふ。
天の光りと仰ぎ喜ぶ、



花の廣野に立ちたる女童、
膚を蔽ふ　花摺衣、
手に捧げたる千種の花環。
耳に何を聞き　一人樂む？
自然なる鳥の歌ひか？
自然なる風の調べか？
目に何を見て　一人樂しむ？
野邊を飾れる千種の花か？
うら〳〵霞む空のけしきか？
否。
心の和らぎ　心の樂しみ、

心の休みは　心の樂しみ！

天女が　サット抹く刷毛に
金色　眩く光り輝き、
御佛中に現はれたまふ、
圓かに備はる　四八の相好、
高く聳ゆる烏瑟　蒼天より青く、
右に旋ぐる白毫　皓月より白く、
流るゝ光明徧ねく照し、
青蓮の眸を垂れて　慰安を與へ、
丹華の唇を開きて　法喜を授く、
光に觸るれば　心輭らぎ、



惱み跡なく　悶は失せつ、
苦み消えて　樂しみは滿つ。

天女　小指を彈く時、
天童　盤とり、　槌取り、　鉈とり、
揮ふ燒刄の匂ひの冴えに、
刻む肘より　流れ〳〵て、
血や交ふ、　呼吸や通ふ、
笑みを湛ふる彫像の
見下ろす眸　慈悲に滿ち、
花持つ　手首　肥え　柔く、
刻む天童の我目をいぶかり、

打見る天女　思はず　微笑む。
見るもの　心和らぎ　樂しみ、
目には花咲き　蝶舞ひて
破旬が閨に　和らぎ至る。

# 第三篇

## 其一

荒れすさびたる暴風和ぎ、
葉をもがれ　枝を折られ、
終日喚めき叫びし樹蔭の



摩まれ仆され伏せる草葉に、
雲　名殘なく　高く晴れたる
秋の夜天を聲すゞしげに、
歌ふ蟲の音　寂びて靜けく
やさしく　あはれ身にしむ如く、
睡眠安けき破旬が耳に
遠きが如く、近きが如く、
連れて奏づる　樂響き、
心に吹くや　春風の
内に和らぎの聲を聞く。

破旬　目醒めて耳を疑ひ、

何をか見ると　我目を訝る、
美き音の　餘音　空中に殘りて
今なほ振ひ　波うてる如、
美し形の影　消えて
今なほ幻像　うつれる如く、
芳ばしき香の風に散らされ
今なほ　かすかに匂へる如く。

破旬が心　影を尋ねて
醒めにし夢の　境を憧がれ、
破旬が形　うつゝにありて
心は夢のあとのみを追ふ。



やゝ程過ぎぬ……
全く醒めし彼　破旬
天を仰ぐや——
呀と　愕く　顏色灰に、
戰く唇　色かはる。

ア、ラ不思議に不思議なる哉！
灰色染めたる天の河原に、
光明なき世の光明と仰がる
我が北光の光りなきは
そもや何故？そもや何故？

氷飾れる地を覆ふ天に
弓と撓まる　凄き光りの
北光なきは　そもや何故？

破旬が背　腋に冷く
身にしむ汗の流れ　流るゝ、
破旬愕き　且つ怪しみ、

怪しき哉や！
我　かの弱き人にありてふ
冷たき汗を知らざりつるを、
今　かく背　腋に冷く



冷たき汗の流るゝ　怪しさ！
さては　我老い　衰へたるか？！

瞬く眼に溢るゝ涙
頬を傳はり　ハラ〳〵流る。

怪しき哉や！
我眼より溢れ出でしは
こは　かの弱き人にありてふ
涙なるかや？涙なるかや！
悲しむ時に湧とし聞ける
こは忌はしき涙なるかや!?

眼かすみて朗ならぬは
こは忌はしき涙にかすむか!?

破旬　目を摩り天を仰ぐに
爛々たりし　天津御星の
小さきは　あるか——なきかに光り、
仄かに遠く　遠ざかり行き、
大ききは　射る光　鈍り、
次第に弱く　弱まさりゆく。
破旬増々愕き　怪しむ。

## 其二

氷の里の長き　長き夜、
灰色染めたる　廣き大空、
ヤ、　星影の薄く　薄らぎ、
烟より淡き　白雲かゝる
破旬が眺むる　東の方
薄く　薄き　白きもの來る。

### 摩利支天の吟

八重霧とざす闇の扃を
我　しのゝめの鍵もて開き、
八重雲かゝる夜の戸帳を

曉の手に　揭げはづし、
天津御星を　一とつ〳〵
遠く　かい遣り　弱め鈍らせ
日に先きだちて我來たる。

夕のかけし　黑き幔幕。
天津乙女の細き手にあげ
宵の下ろせし　暗夜の戸帳を
しばし　弱き力に外づし
月に先だち　我來たる。

石をも　金をも　溶かし　沸かし、



城をも　宮をも　灰とし　煙とす、
かの大なる力ある火も
我を得燒かず、我を犯さず。

立木を倒し、石を轉ばし
樓　高殿　覆へすべき
かの大なる力ある風、
我を得吹かず、我を倒さず、

堤を破り、家を流し
鐵を浮かべ　石漂はす、
かの大なる力ある水、

我を濕さず、我を流がさず。

我　來れば　形あり、
我去れば　形なし、
我來れば　生命あり、
我去れば　生命なし、
目に遮れど　捉ふるを得じ、
前へ——前へ、これわが進路！

罪惡の流れの源　枯らし、
惡獸　怪鳥　避け　潜み、
魑魅　魍魎　逃げ　躲くれ、



鳥歌ふべく、人は醒むべく、
我があるところ　暗きを拂ひ、
喜び來たり　樂しみは滿つ。

愛しき　童女の　我が姿、
あどけなげなる　我が姿、
老を知らざる　我が齡、
衰ふことなき　我が力、
海には起す　金色の波、
水沫に畫く　奇しき色、
樹木は花咲き、玉は潤ふ。
見よ、かの氷の奇しき色彩、

見よ、山の端の珍しき色。

これぞ　わが神業、これぞ　わが神業、

木に　石に　油に　金に

潜む　常磐の力ある我、

失せず、滅びず、永久なる！

爾時世尊告菩薩衆言有一菩薩名摩里支而彼菩薩恒行日月之前彼之日月不能得見菩薩今此菩薩而不能見不能捉不能禁縛火不能燒水不能漂離諸忿異無敢輕謾諸惡寃家皆不得便

（大摩里支菩薩經）



## 其三

下界の様の痛ましきかな！

世を常闇に　月も日もなく、

世を刈薦の亂れに　亂だし、

和らぎ　睦ぶ　人の世界に

人相食ませ　相闘はせ、

誇り顔なる破旬を挫き、

天に光榮ある光明あらしめ、

地に平和を布き得べきもの、

ア、　我ならずして誰かある？

地上に嘆く人の子の聲、

苦しみ　惱やむ　人の子のさま、

ア、　我ならずして誰か救はむ？。

暴らぶ力を抑ふべきもの、
殘酷心の角　折くもの、
ア、　我ならずして誰かある？

平和求め　温暖求むる
地上の人の子等が聲　聞け！
たとへば　飢ゆる幼稚兒の
乳房求めて泣くに似て
泣き悲しみの　涙もて
天に平和下せと求む。

弱き者の　涙に求むる、



弱き者の　涙に祈る、
弱き己　衞らんが爲め
哀れみ　求むる　何ぞ切なる！

涙に動く破旬にあらず、
涙に購ふべき平和にあらず、
長き平和は　劒より來る、
眞誠の平和は　力より生む。

地上の平和亂しゝ破旬
弱き人の心の奥に
深く嚙み入り　深く衝き入り

酒に醉はしめ　蜜に飽かしむ。

亂れの水源　人に起り、
爭ひの境界　地上にあり、
弱き人の涙に求むる
平和　何ぞ　薄く　小さき！

苦しみの元　貪慾にあり
爭ひの基　野心に起る。
飽かぬ貪慾　飽かんと欲し、
飽かぬ野心を　遂げんと欲し、
力ある者　力を憑み、



財ある者　財を憑み、
家族ある者　家族を憑み、
弱きを抑へ、貧しきを壓し、
少なきを輕るめ　小さきを蔑みし、
相呑み、相噬み、相鬪へり。

人の世　野心絶えぬきはみ、
人の世　貪慾止まぬきはみ、
爭ひ絶えじ、平和來らじ、
たとひ平和　裝ふとも
そは唯一時、そは唯表面、
内に磨かん　野心の劒、

眠れる獅子の一休み、
遂に一時の平和のみ！

其四

強き力に野心を挫き、
猛けき威　貪りを刺し、
上なく強き力を仰ぎ、
仁慈に滿てる　光明に浴し、
己れの力　小さきを知り、
財寶　家族の　敢果なきを知り
爭ふことの　愚を覺り



貪ることの　甲斐なきを知り
平和　來たる、人の世界に。

鋭き劍　利き鋒に
上なく　強き力を示し、
弓勢強き羽々矢もて
高く憍れる心　射落し、
平和　來たる、人の世界に。

強き力を怖れ　憚り、
強き力を仰ぎ　尊み、
此に蔭あり、これに憩ひ、

仁情の光明　仰ぎ喜び、
これに照され、これを樂しみ、
憚りありて　相讓り、
恐怖あり、て　相便り、
喜びありて　相睦び、
平和　來たる、人の世界に。

光明なき世に　光明を與へ、
悲しみ　嘆く地上の人に
慰安　平和　温暖與へて、
亂の源を　人の世に絶ち、
爭ひの境界　靜むべきもの



鋭き鉾と　利き劔
强き弓矢の　我ならずして
誰れか　平和を地に布き得べき？

地上に悲しむ人を憐れみ、
悲しみ泣ける子等を思ひ、
平和を地上に布き得べきもの
ア、　我ならずして　誰れかある？

正しき心に　研ぎ磨き、
直き心に　矢矧ぎたる
我が弓矢より　平和生まる。

弱き者の求むる平和、
そは唯言葉　唯文字、
長き平和　遂に來たらじ。

暴きを懲す　強き力、
亂を治むる　威き力、
強く　猛けき　我ならずして
降魔の任に　誰れあたる？
あはれなる人の子の爲め、
妖しき雲を　遠く　かい遣り
黑き　眞暗き　暗夜を破り、
地上の子等に　光明を與へ、



堅く　冷たき　氷を融かし、
地上の子等に　温暖を與へ、
我が鉾　劍　弓矢もて
平和を布かん　人の世界に。

## 其五

宣言　強く　武威けれど、
かぶろ姿の愛らしき
摩利支天女の宣せる如く
王宮の軒　飾ざりし垂氷、
高く　聳ゆる　氷の山の端、

薄紫に　岨　稜　色彩る。

摩利支天

「汝　世界の平和を嫉み、
世界を　堅く氷り凍てさせ
冷たさものとし喜び　樂しむ！
かの寒風に苦しむを見よ、
相搏ち　相食む　何ぞ情なき！
汝は之を樂しみとする！

我　摩利支天　此に來り、
暖かき風　そよ吹き　起り、



堅かりし世は　和らぎ睦び、
汝　力を恃む甲斐なく、
喜び　誇る夢は跡なく、
日月の光　世を輝らし、
平和の光　世に瀰り、
春風吹きて　蝶鳥　舞はん、
春雨降りて　花や　開かん。

汝　日月の光を蔽ひ、
暗らませ　氷らせ　凍てさせたるも、
これ　永久の暗夜　氷かは？
我　摩利支天　此に來り

汝が力　汝か業は
失せ　滅び　消え　去らん。

疾う〳〵　歸へれ　人の　世を去り
日も月もなき　常闇の國、
氷　鎖せる　氷の世界、
汝が嘗て住にし場所へ。

止

此處は人の世　人の子の里、
汝が止まる世界にあらず。
疾う〳〵　歸れ　汝が住家
氷閉ざせる　氷の國へ！



永久なる　間なき苦しみ、
盡ることなき　惱み來り、
汝　住居を　永久に　失ひ、
活動亡び、力失せんに、
息の根通ひ　生命ある今、
疾う〳〵　歸れ　汝が古鄕へ！

此處は人の世　人の子の里、
疾う　立ち歸れ　歸らずや、
禍來り　苦しみあらん、
歸へ　疾う〳〵、汝が古鄕へ。

風に搖らるゝ黄金の鈴の
微妙じき清き　高き　響きの
遠音になりて　殘れる如く、
女童姿の　摩利支天
破旬を喩し　宣り玉ふ。

## 其六

聞ける破旬の怒り　劇しく
ハッタと睨む　眼眩しく
涙流るゝ、されど屈せず、

破　旬



女の童なる摩利支天　聞け。
我は天地を生める身ぞ、
我が心のまゝなる里ぞ、
見よ　我が魔風に　氷らせ凍てさせ
吹き散らし去り　埋め去れるを、
かく大なる力ある身ぞ。
禍ありとか、苦しみありとか、
惱みありとか、面白き哉！
知らずや？我は
苦しみを以て　樂しみとし、
禍を以て　喜とすを。

女の童なる　摩利支天、
汝　知らずや？
我　利劍あり、燒刄匂へり、
我に鋒あり　鋭く尖がる、
我に術あり　奇しき　怪しき、
我に大なる力あるを。
汝が手にせる　そは何物？

摩利支天
「これはこれ　口を縫ふ針、
惡人の　口を縫ふ針
汝が口　縫はんとて



我之を持つ、我之を持つ。

破　旬
針となる？
我　魚ならず　針を恐れず、
我　布ならず　針に縫はれず、
汝が計畫　何ぞ幼稚き、
汝が手段　何ぞ愚けき！

破旬憤然　突立ちあがる、
一陣の風に掀られ起る
茅野燒く火の猛けるが如く、
「女の童」とムンズと掴む、

力餘りて　我が利き爪に
掌刺され　我と傷つく。

支天は依然もとのまゝなる。

波旬　ます〳〵怒り猛けり、
血に染む掌　開くや　否や、
跳りかゝりて　唯一抓み。

支天は　依然　もとのまゝなる。

いよ〳〵　焦立ち　跳りかゝる——



破旬　ハッタと息塞まる——
摩利支が早業　針うちて
破旬が唇　縫ひとぢ　貫く。

彼菩薩手執針線縫惡寃家口之與眼令不爲害
大摩里支菩薩經

## 其七

氣を焦らち　怒り猛り
破旬が現はす　彼が本相、
天空とも　水とも　分ちかねたる
涯際なき　廣き大海原に
半ば躱くれ　半ば現はれ、

胸より上は　雲に入りたる
大須彌山の峰の頂き
高く聳えし　破旬が頭、

世界の半　覆ふ陰翳の
月日の光　遮り止どめ、
萬古の雪を　絶えず戴き
心なき雲も　い往き憚かり、
翼ある鳥　翔りなやめる
大雪山の峰　見下ろし
息吹きの狹霧は　海をも陸をも
包み　覆ひて　唯濛々、



足蹈む　響き　三千界に
轟き渡り　震ひ　どよめく、
右手に飛び交ふ　彗星
左手に閃めく　大熊星。

右手なる魔扇　サト煽る、
音に崩れ　風に噪ぎ、
大綿津美は波湧き　をどり
四州　石飛び　岩　狂ひ舞ひ、
刄の如き冷たき黑風
どう〳〵　荒びて　黑闇々。

膚にあたれば　膚　劈かれ、
石に觸るれば　石　凍て　碎け、
荒れたつ大波　立つまに氷り、
碎かれ　颶りて　氷り合ひ、
斧鉞　降り積み　刄刀　轉び
列び聳え　亂れ立ち、
峙つ　峰々　窪む　谷。

破旬　肩さき　搖がす　間なく
北光サット　迸り、
天に渡せる色彩る架橋、
亂るゝ吹雪　と絶ゆる刹那、



高低みだれ　亂れし廣野
氷の尖頭　氷の虧隙に
映り　色どり　光輝燦爛。

猛けり立ちたる　破旬が勢ひ
天を掠め　地を拂ひ
吹きしく風の　誘ひ起せる
吹雪　地を捲き　天を蔽ひて
あはや　三界　刄向ふものなく
粉となり碎け　飛び　散らんとす。

破旬が向へる　東の方、
勢ひ鋭どく　猛けり狂ひ
颯然　吹き行く風の前途に
八荒輝らせる　大光明、
天の梔弓　引き絞る
弓弦離れし　白羽の羽々矢、
閃めき　射られ　眼眩ゆく
たぢろぐ　破旬が耳を劈く
天地　どよめく　大音聲。
日に先ちて　來たる我、
月に先だち　來たる我、
進むは我が前途　我が目的、



かへらぬ我ぞ　歸らぬ我ぞ。
見よ、彼處　破旬が前に
八百由旬の大摩利支天
金色眩ゆき　野猪の背に立ちて
火焔　炎々く　空を焦し
光明　赫々く　四方を輝らす。
劔を擧げて　招く空に
光明みなぎり　到らぬ隈なく、
右往　左往に　化性逃がれ、
怪鳥潛まり　魍魎かくれ、

北光消へて　空は緑に、
赤く　ひらめき　紫がゝり、
黄に　紅に　緑に　樺に、
氷山　氷塊　砕けて光り、
漲り　満ちたる大洪水、
野なく、川なく、湖もなく、
漫々　汗々　際なく廣がり、
汪々　蕩々　ひまなく漲ぎり、
聳えし山の峯のみ殘り
雲　色どられて錦を晒らし、
鳥は歌へり　しのゝめの曲。



## 其九

金色輝やく　荒猪の齒がみ
怒り　はげしく　猛けり走る
四の蹄に　風卷き起り
怒毛逆たち　眼爛々
背に突立つ大摩利支天、
右手に翳せる　斬魔劔
燒刄　亂れて　明晃々。
左手を擧げて　高く招けば

卷舌　動き　大風　起り、
天の河原に　星飛び亂れ、
颶母　現はれ　洋　荒れ立ち
掀られ　あがる大激波、
破に呑まるゝ大氷山、
破旬　怒りて　右手に提げ、
手球と拋つ　摩利支が方へ。

飄ふ旗雲　ちぎれ　飛び、
擾ぐ天宿　雨と降り、
破旬がうち揮る鋒の閃めき、
黑雲　引き裂き　電光　拋げ出し、



驟雲　垂れ　布き　石礫　とぶろき
雹の礫の　大火矢　小火矢、
漫々　漲ぎる水を擊ち
泡立ちあがる　大水柱、
波　湧き跳り　水　あがる。

氷山來れど　些とも動せず、
靜かに右手の劒翳せば、
油然　湧きたつ　雲の峯、
閃めく　電光、　朱網　切れ　飛び、
六龍　駕したる　雷車輾りて、
天地動搖めく　大雷雨。

皷々く　震へば　山岳　答へ、
手にせる斧は　雲を劈ざき、
頭うたれて　たじろぐ破旬、
足　蹈み直し、勢ひ　劇しく
輕々　抛つ　大氷山。

體にあたれど　少しも搖がず、
摩利支は依然　もとのまゝなる。

破旬　鉾取り　飛びかゝる、
雲の亂れは　左手に　右手に、
電　閃めく　西に、東に、



破旬が黑雲　鉾を降らし
金色眩ゆき支天が雲には
金箭　銀箭　亂だれ　射出され、
矢玉の亂れ　途絶ゆる間
氷山なげうつ　破旬が早業、
山岳　崩るゝ支天が勢ひ、
海に　波湧き　地に地震ふるひ、
叫べば　どよむ　和田原
ふりさけ見れば　波くだけ
金波おどろく　大海に
瞳々く　波を蹴　水を開き
現はれ出づる　大日輪。

仰げば　天空に　黄金の光明、
天の八重霧　消えて　あとなく
晴れて　緑の空　高し。

破旬驚き　ためつ望む、
金色流るゝ光明のうちに
青き寶冠の佐保姫　立てり。
花の御車　飾り　美々しく
香の烟は　霞　棚引き
花環　花籠　色どり　あやに
鳥舞ひ　蝶飛ぶ　姫の傍に。



破旬　怒りて　鉾執り直し
勢ひ　するどく　立ち向ふ、
金色放てる雲のうち
摩利支　弓をよく引き絞り、
弦音たかく　矢聲とともに
颯と放てる　天の羽々矢
破旬が心の　眞唯中へ。

痛手に喚めく　破旬　目がけ
金毛ふるひ　鼻息あらく
四の蹄に　地を蹴りて
火花を散らし　迫まる猪の

牙はかけたり、破旬は飛べり、
星　亂れ　雲　包み、
遙か北なる　奈落迦の里
紅蓮の氷　閉せる谷へ。

# 第四篇

## 其一

破旬　奈落迦の紅蓮の氷
厚く閉ざせる獄のうちに
絶えぬ苦しみ　間なき惱み



嘗むる世　長し　盡未來際。
鉾劔より、弓矢より、
地に平和を布きたる摩利支、
今や忿怒の相より
還れる姿　優しき女童、

野山　海原　光明滿ち、
歡喜の聲のさゞめき渡り、
摩利支天子が功績稱へ
讃むる歌ひの節　面白き。

佐保姫

「めぐゝ　和らぐ　我なれど
暴き力に抵抗い得ねば
車　破られ　飾花　萎み
衣　ちぎられ　寶冠　壞さる。

大摩利支天　出ましまさず
暴き力を抑へまさずば、
我　永久の嘆きに沈淪み、
我　永久に泣き暮すべし。

あはれ尊き天の御力



破旬を降だし　戒めて、
平和來たる。人の世に
天子の御力　あはれ尊き。

小禽も　蝶も　共に稱へよ、
草木　鳴も　共に讃せよ、
天地　等しく聲あげ　歌へ、
摩利支天子が　高き功績を。

草木蝶鳥

春の音づれ　喜びあへる
弱き我を苦しむ破旬、

泣けど　叫べど　唯さいなみて、
情なき業の絶えず　間なく、
冷たき風の猛けり　荒さみて、
息づみ潜み　忍び音に泣く。

弱き我等を憐はれみ玉ひ、
上なき強き御力に
利き兵器に　破句を破り、
世に光明あり　平和あり、
嬉しきかなや！　樂しきかなや！
我等は崇む、　大摩利支天！



猛き天子の御力ならで
今日の光明を誰れか　與へむ？
武き天子の神業ならで
今日の暖温を誰れか　來さむ？
強き天子の御庇にあらで
今日の樂しみ誰れか　授くる？

永久なれ　天子の威力、
永久なれ　天子の武運、
永久なれ　天子の光明、
豐さか登れ　天子が力——

## 其二

摩利支天

「汝等が稱ふる平和
我が劒　鉾もて換へし
此平和　いまだ　よからず、
眞誠の平和　いまだ　來たらず。

強き力を　恐れ　憚かり、
爭はず　貪らざるは
いまだ　至れる平和にあらず、



眞誠の和らぐ道にあらず。

此世に何を我とは執する？
此世に何を我物とする？
我を尋ぬるに　我遂に得ず、
已に我なし、我物あるかは？

過ぎ去し方を見るに　已に茫々、
將來を望み見るに　また漠々、
此身　何處より來り　何處へか去る？
何處にか生をうけ、何處へか潛む？

我と他とは　何もて隔て
此と彼とは　何もて分つ？
貪りて　何を　我物とする？
爭ひて　何の　主宰とはなる？

我が眞誠の平和の世界
かくこそと　指さす方に、
千寶磨き　飾れる里の
色ある光明　交はり輝き、
寶樹　綺て　花開らき、
輭風　渡りて　寶鐸響き、
樂を奏でゝ　天童遊び、



歌を歌ひて　奇鳥戯る。

貪らざれば　財　常に足り、
執せざれば　音　常に美く、
溺れざれば　色　常に榮え、
彼も此とに差別なければ
爭ふなく、鬩ぐなく、
我と彼とを隔てざれば、
憍りなく　誇りなく、
自々の樂しみ　他を礙へず、
禮あり　亂れず　睦びあふ
此の平和こそ　眞誠の平和、

此の境界こそ　永き久の平和。

佐保姫　蝶鳥等

その平和こそ　願はしき、
かゝる平和の　早く來よかし
童の眠り　安らけき
此に樂しき　春ぞある、
蝶よ　眩ゆき羽に舞へ、
禽　面白き音に唱へ、
鶯　舞へかし　波の上、
姫君　御手をかしたまへ、
共に歌はん　春の曲、



共に舞ふよ　春の舞、
共に稱へん　春の平和を。

（完）

すひかつら　終

すひかつら

著作者　中谷無涯

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田むゑ

印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　金澤求也

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂

印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社

明治三十九年二月十二日印刷
明治三十九年二月十五日發行

（實價金七十錢）